
仮面ライダージャスティス

キーショット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー・ジャスティス

【Zコード】

Z0306Y

【作者名】

キーショット

【あらすじ】

完全オリジナル作品の仮面ライダー「ジャスティス」。人はベルトを手になるとそれをどう使うのか？

強大な悪に立ち向かい人々の平和を守るのか？また、その力で人々を支配するのか？そんな物語です。

キッシュ「コピーは「変身。」

* ときどきシナリオ修正がありますが、あしからず。

主人公&ライダー紹介

主人公&ライダー紹介

・久保 武／仮面ライダージャスティス

19歳。本作品の主人公。茶色と黒の混じった髪で、基本赤色のTシャツに黒のジャンパーを着ている。

口が少々悪いが、親切な青年。悪者には容赦せず、少々行き過ぎた鉄槌を下すことがある。

基本的に自分から突つかかつたりはしないが、人が襲われていたり相手から突つかかつてくると容赦はしない。職業は上流階級専門の料理人である。そのため金持ち。口癖は「馬鹿かお前は。」

・仮面ライダージャスティス

オレンジと黒のツートンカラーの仮面ライダー。複眼は白色であり、モチーフはトカゲ。トカゲといつてもアマゾンのような荒々しさはない。

戦う環境によつてその環境に適したフォームにチェンジすることができる。（その環境だけしか使えないわけでもない）

・ジャスティスフォーム集

・ガイアフォーム

基本形態。市街地などで使用し、主に肉弾戦で戦う。必殺技は「ガイアライダーキック」。足に周囲の物質を引き寄せ、固める。それを相手に叩きつける技。固まつた物質は技の終了後元に戻る。

・ジャスティスドライバー

ベルトをイメージすると、自動的に装着される。「変身」の音声

コードで装着者を変身させる。真中に「適応石」という鉱物が埋め込まれており、それによって装着者を変身させることができ、フォームによって色が変わる。ベルトの右側にチェックメイトボタンというものが付いており、押すことで電子音声が流れ必殺技の体制へと入る。

・適応剣ジャスティスブレード

ジャスティスの腕からオレンジと黒の光が剣をかたどりて出現する剣。主にガイアフォームの時に使用する。鍔のところに丸いくぼみがありそこにベルトの適応石をセットしてチェックメイトボタンを押すことで必殺技を発動する。必殺技は「ガイアライダースラッシュ」。刀身に周囲の物質を引き寄せ、固めて刀身を巨大化させる。そして、そのまま振り下ろす技。固まった物質は技の終了後元に戻る。

主人公＆ライダー紹介（後書き）

初めて小説を書いてみたんですけどいかがなものでしょうかね（笑）
がんばって連載を続けたいのでもよろしくお願ひします

第一話 HENSHIN (前書き)

この作品をトライアルせん、そして読者の方へと捧げます。

第1話 HENSIN

ドカアアアアアアアン！ドゴオオオオオオオオオオオオ！

崩れる大地、落ちる大空、割れる海。まさに世界の崩壊。その破壊活動を行っているのは、異形の怪物たち。怪物たちは戦っているやつらもいれば、仲間を引き連れて周辺の建物を破壊しているやつらもいる。

『グアアアアアアアア！』

力尽きて倒れた怪物がいた。怪物の体がどんどん変化していき、なんと人間になつた。そして腰に巻かれていたベルトが砕け散つた。人間がベルトの力で怪物になつていたのであつた。その地獄のような光景を見ていた少女がいた。そしてつぶやく・・・

「ジャステイス
正義・・・」

「痛つたああああああああああああ！」

頭をぶつ叩かれた少女がいた。その名は水面みなも灯あかり。

「明日は東大の入試だというのに爆睡とはずいぶんと余裕だなあ水面！」

怒鳴るのは『天道ゼニ』の講師 宇都宮うつのみや拓龍丸たくりゅうまるである。

あ、そつか私まだゼミにいたんだつけ。

当然のことく拓龍丸にこつてりしほられた灯は1時間後にやつとゼミから解放されて、友人の佐久間さくま水穂みずほと帰るのであつた。

「馬鹿だなあ灯は。あしたなんだよ！？あんた入試大丈夫なの！？」

「もうコース！オッケーだよ！絶対受かるからだいじょーぶだつて！」

「はあ、まあいいや。じゃ明日ねー」

水穂は疲れた様子でアパートへとはいって行った。
あの夢はなんだつたんだろう・・・。今思つてみれば何の夢なのか
見当がつかない。

「まあ、いつか。明日に備えて眠りつと」

そつまつて灯は夢の中へと落ちていくのであつた・・・

翌日

「やつぱり入試つて緊張するなー。」

灯は東大入試の試験会場で緊張を感じつてぶるつとした。

「適度の緊張は大切だしなー。まあ、いや受験戦争参戦するぞ！」

そう呟いて校門をくぐれりすると正面に試験官らしき男が立ちふさがつた。

「あの、どいつもりえませんかね。」

灯がそつまつても無反応だ。

「あの～聞いてますか？」

試験官らしき男はゆうくつと二つを見ていにやりとすると、腰辺りに手をかざした。何かと思って見てみると急にベルトが現れ男に装着された。

「变身。」

そうつぶやくと男の体が変化し、蝶の怪物へと変貌した。当然悲鳴をあげる灯。

周りの人たちも怪物の出現に驚いてパニック状態になり、もう入試どころではない。

このまま死んじゃうのかな・・・意識が遠のいていく中ではつきつ
と聞こえた声があった。

「变身。」

聞き違いかと思つた瞬間、オレンジと黒のツートンカラーのバイクに乗つた怪物・・いや、どっちかというと怪物まではいかないうな者が蝶の怪物に体当たりをし、怪物が吹き飛んだ。

「ラ、ライダー。」

灯はなぜかそうつぶやいてしまつた。

『お、お前もジエネシスか！？なぜここと話をやるー。』

蝶の怪人はライダーに問いかける。すると、

『一緒にすんなよザーチョウが。ビーフショットのお前の勝手だ。』

『ふざけたやつだ。今すぐ消えれば命は助けてやるが。』

『お前が消えたほうが早いと思つんだけだなあ。』

ライダーは余裕の態度で蝶の怪物を挑発する。その光景を見ていた
灯はあぜんとしていた。

『なんだとー殺してやるーもう片まらないもんね！』

『やつてみ。』

蝶の怪人は腰に装着しているベルトの中心にある石のような物から
色鮮やかな扇子のような武器を取り出し、ライダーに襲いかかって
いく。

『オラアアアアア！』

スペアアアアアアアン！

蝶の怪人がライダーの胸を切りつけた。そのあとも連続で切り込んでゆく。

『ハハハハハ！死ねよおらあ！ハハハハハ！』

ライダーは身動きもせず斬撃を受け続けている。すると、ライダーが蝶の怪物に問いかけた。

『そろそろお前、ぶつ飛ばしてもいいか?』

『はあ? 状況わかってるのかお前? お前は今なすすべもなく斬りつけられてるんだぞ? そんな野郎がどうやって俺をぶつ飛ばすんだよ! ?』

蝶の怪物の描画通りダメージの効いてきたライダーは徐々にひざまずいてきてるのであった。

『そろそろ首もいりつけられーあばよ、ぱっと出ジエネシス!』

蝶の怪物はそういうと扇子の武器をライダーの首めがけて振りかぶった。

「危ない!」

灯は目をふさいだ。

スペアアアアアアアン!

何かが吹き飛ぶ音。灯はなにか吹き飛んだかは大体察しが付いていた。すると、蝶の怪物が叫ぶ。

『な、なんだとー!』

その声に驚き灯は、目を恐る恐る開いてみた。するとなんとそこには、扇子はライダーと怪物のはるか50メートルくらい先に転がっているではないか。

「ライダーの体制からみておそらく蹴りあげて吹き飛ばしたのである。」

『おこざマチヨウお前って馬鹿だな。』

ライダーが挑発する。

『なんだとー?』

『お前は本当に馬鹿だ。なんで俺が演技をしていたとは思わないんだ?』

『ーー?』

蝶の怪物と灯は同時に驚いた。あのすさまじい斬撃の中でそんな余裕があったのかと。

『そろそろ決めるとするか。』

ライダーがベルトに手を伸ばしベルトの右にあるボタンを押した。

【ヒエリ&ヒカル】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのアスファルトがライダーの右足に纏われ、固まつていいく。

『なんだ、それはー? そんなボタン俺のベルトにはないぞー?』

よく見てみると、蝶の怪物のベルトとライダーのベルトはほとんど違っていた。

『お前とは格が違うんだよ。』

ライダーはもう一度腰のボタンに手を伸ばし、ボタンを押した。

[logo] yaboo

電子音声が響き渡り、猛スピードでライダーが蝶の怪人の懷へと入り込む。

『ガイアライダー キック。』

ライダーはそう呟いた瞬間アスファルトを纏った右足を蝶の怪人のあごに蹴りこみ、空中へとぶつ飛ばす。

蝶の怪人のベルトが碎かれ、試験官の男の姿となり地面に落ちて気絶した。

『あばよ、ぽつと出ジエネシス。』

To be continued . . .

第1話 HENSHIN（後書き）

どうでしたでしょうか。初めてだったのでどんな感じかは知りませんが、主人公を1話目に出さないというのは仮面ライダーアギトに似せたつもりなんんですけど、微妙だったかな（笑）次回もお楽しみに！まあ楽しんだかはしらんけどね

第2話 HENSHUNSYA（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「絶対受かるからだいじょうぶだつてー」

「変身。」

『なんだと殺してやるーもつとまらないもんねー』

『ガイアライダーキック。』

『あばよ、ほつと出ジュネシス。』

第2話 HENSHUNSYA

『あばよ、ほつと出ジュネシス。』

ライダーはそのまま、自分のベルトを外し、変身を解除した。どうやら二十歳くらいの男性のようだ。

男はそのままバイクにまたがる。灯はあわてて男に近づいて行つた。

「えっと、私水面 灯といいます。あの、助けてくれてありがとうございます！」

灯はとりあえずお礼をいった。男の正体がなんなのかはそのあとだ。

「あの、お前は何と言つんですか？」

「森 伸吾。」

男は森 伸吾といつらじ。

「伸吾さんですねー！」

「嘘だ。」

「へ？」

なんなのだ?」の男は?

「本名は久保　武つていうんだ。もういいか？」

「武さん、もういこかつてどうこう……」

「だから帰つていいかつて聞いてんだよ！」

と、武は怒鳴つた。一瞬ひるんだ灯だが、負けてはいない。

「あの、武さんあなたは何者なんですか？どうして怪人になつたりしてたんですか？」

「お前ジエネシスを知らねえのか？」の非常識が！

「…？」

普通の人がなぜ知つているのかが逆に聞きたいところだ。すると、

「まあいい、俺の家に来い。お前の知りたいこと全部教えてやるよ。仮にもジエネシスに襲われたんだしな。」

好奇心から灯は、行くことにした。

→武の家

「す、すごい…」

灯は言葉を失つた。灯の目の前には超豪華な豪邸があつたのだ。まあ、豪華だから豪邸というんだけれど。

「さつさと入れよ。」

やつまつて武は豪邸へとまつてゆく。

「あ、待ってくださいよ。」

灯は武の後を追つて豪邸へはいつて行つた。

豪邸の中はまるで博物館のようだつた。史上最強の恐竜のティラノサウルスの化石や、カブトムシを始めとする昆虫の標本、何千冊と並べられた本など、ある物をいえぱきりがない。

「見とれてないでさう」と來い。」

武はそつこつと一つの部屋へとはいつて行き、灯もそのあとを追う。

その部屋はそこは応接室のような場所だつた。武は紅茶をいれ、灯と向かい合つてソファに座つた。

「で、何が聞きたい?」

「あの~まず最初に聞きたいのが、あの怪人はなんだつたんですか?」

灯は蝶の怪人はなんのか質問をした。

「あれは、破壊を創る者達『ジェネシス』だ。個体によつて違うが、基本は『ジエネシスドライバー』での姿に変身する。」

「あの、私が見たときはベルトが急に巻かれていたんですけど・・・」

「あれは、秘密結社『メイキング』の超瞬間転送システムによるものだ。」

秘密結社メイキング？ そう灯が聞き返すと武は説明をした。

「秘密結社『メイキング』というのはジェネシスのサポートのようなもので、ジェネシスドライバーを製造、販売もしている。超瞬間転送システムというのは、使用者が手をかざすだけでベルトを転送するシステム。つまり、いつでも好きな時にベルトを装着し変身できるわけだ。」

「じゃあ、あなたもジェネシス？」

武は首を横に振った。

「俺のベルトはメイキングの作ったものじゃない。まあだれが作つたかは置いておき、おれはジェネシス達からさつきお前を守つたようじュネシスの悪事を未然に防ぐ、またはベルトの破壊を行つている。」

なるほど。だから蝶の怪人も武のベルトは見たことがないと言つたわけだ。

「他に知りたいことは？」

「えっと……」

ビーッ、ビーッ、ビーッ

灯が質問をしようとしたとき、突然警報が鳴つた。

「ジエネシスか・・・いくぞ光!」

「灯です!」

そう突っ込みながら二人は豪邸を後にする。

♪公園

そこでは蝶の怪人が子供たちや大人を襲っていた。

「お前は・・・」

武は首をかしげる。蝶の怪人はさつき倒したはずだ。

『さつきはやつてくれたなあ・・・でも残念だつたな!おれはベルトを一本持つていたんだよ!』

「え、一人何本も持つてるんですか!?」

灯は武に尋ねる。武は、

「知らん!とにかく倒す!」

武が手をかざすと、腰にジャステイスドライバーが装着された。手をクロスし、ある言葉を叫ぶ。

「変身!」

すると、ベルトからオレンジと黒の光が武に巻きついていき眩い光

を放つてライダーに変身した。

『俺はこの姿を仮面ライダーと呼んでいる。』

「仮面ライダー・・・」

武と灯が話していると、蝶の怪人が扇形の剣を2本持つて斬りかかってきた。

『下がってろ。』

武はそりと灯を遠くへ突き飛ばした。

ドスン！

「痛つたあー！女性には優しくしなさいよー！」

灯の文句を無視して仮面ライダーは蝶の怪人の攻撃から身を守る。

『今日は手加減なしだぜ。なんせ2回目だからな。』

そつ言つて蝶の怪人の腹を蹴りつけた。

『いっちのセリフだ！すぐに殺してやるよー。』

ガツ！、スマアアアン！、ドスッ！

仮面ライダーは蝶の怪人の斬撃を手で防ぎながら腹に蹴りを入れていつてる。

『決めるぜ。』

【ヒエロ&ヒカル】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのアスファルトが仮面ライダーの右足に纏われ、固まつしていく。

『そんなの食らうかよー。』

そつこいつと蝶の怪人は背中の4枚の羽を広げて空中へと飛び上がった。

『お前のその必殺技は上空へ蹴りあげる技だろ！？なら空中にいとけば当たらねえんだよー。』

灯は確かにそうだと思った。空中にいる状態だとキックが当たらないではないか。すると

『ハハハハハ、本当に馬鹿だなお前はー。』

『何だと？。』

どつこいつだらう？灯はそつ思つた。

『そつとも言つただる「手加減なし」つてな。見てな、すぐに潰してやるよ。』

『できるわけねえだろ！ハッタリかましてんじやねえよー。』

仮面ライダーはベルトの右側のボタンをもう一度押した。

【 ま お お だ 由 】

電子音声が響き渡ると仮面ライダーは猛スピードでダッシュした。

『馬鹿が…当たらねえて言つてんだ・・・』

すると仮面ライダーは飛び上がった。

『なに・・・!』

あのダッシュは助走だったのか!蝶の怪人と灯がそう思つた時にはもう遅かつた。

『ガイアライダーキック。』

そう駆くとジャンプキックで蝶の怪人をぶつ飛ばした。

『ぐぎやああああああああああ!』

ベルトが碎け散り、試験管の男に戻つて男は公園の砂場に落として氣絶した。

「やりましたね!武さん!」

灯は武に駆け寄つたが、なぜか武は無視してベルトを外した。

「武の応接室

「あの、私武さんの助手になつてもいいでしょうか?」

「！？」

武は意味がわからなかつた。助手といつたつてこんな女性を戦いに参加させてもよいものなのだらうか？と。

「お前の場合邪魔にはなつても役に立ちそうだとは思えないんだけどな。」

「なつ、そんなことあつませんよーきっとなんか役に立つことがあら・・・はずです。」

灯は自信なさげに答えた。

「でもまあいい。ただし、給料は働かないと出せないからな。大方俺の豪邸を見て『バーンザメのよつこおい』ぼれにありつきたいだけだろ？」「

「違いますーーーー」というか思いついたんですけど、仮面ライダーの名前思いついたんですけどいいですか？」

「なんだ？言つてみる。」

灯は深呼吸して口を開いた。

「ジャステイツ。仮面ライダージャステイツといふのはどうでしょう？」

「ジャステイツ
正義か・・・いい名前だ。そつこよ。」

灯はたちまち笑顔になつた。

「ありがと「う」やこますー。」

だが

「一ついいか?」

「?なんでしょ「う」。」

「お前受験はビ「う」した?」

「.....」
「.....」
「.....」
「.....」
「.....」

灯は声にならない悲鳴を上げた。

仮面ライダージャスティスの誕生の1日だった。

To be continued . . .

第2話 HENSHUNYA（後書き）

やつと書かせりました！いろいろと変な部分は少しずつ直していく
までの、ぜひ次回も御覧ください！ありがとうございました！

第3話　THE HERO (前書き)

これまでの仮面ライダー・ジャスティスは・・・

「本名は久保^{くば} 武^{たけし}っていうんだ。もういいか?」

『俺はこの姿を仮面ライダーと呼んでいる。』

「あの、私武さんの助手になつてもいいでしょうか?」

「ジャスティス。仮面ライダー・ジャスティスと云ふのはまだついでしょ
う?」

第3話 TEPPONO

ーとあるショッピングモール

「あ、あんたはいつたい何者なんだよー?」

ショッピングモールの地下で髪を染めた高校生ぐらいの男たちがふるえながら後ずさり、中には腰を抜かした者もいる。

『我らは、メイキング。破壊を創る者、ジエネシスの支援団体だ。』

メイキングと名のつた者はチョウチンアンコウの怪物だった。

『力を』えよう。その力を存分に引き出し、利用しろー。』

怪物はそう言つと、男の1人に1本のベルトを投げつけた。

「メ、メイキングさんよ。こ、これ、ビビビビヤツてつ、使うんだよ?」

男はふるえながら尋ねた。

『ベルトを装着しろ。力を手にすることができる。』

怪物はそう言つと、発光して消えた。

そこに残っていたのはおびえて無様な格好の男たちと1本のベルトであった・・・

「武れ～ん・・・」

灯がじんよりした声で武を呼ぶ。

「なんだ?・どうしたそんな変な顔して。」

「普通の顔です!私不安なんです。」

「じつやら灯には何か悩み事があるよつだ。」

「なにが不安なんだ?」

「これから的生活ですよ。」

「なに?」

灯が不安といつのはじつことだつた。住み込みで助手をしてい
るとはいえ、同じ屋根の下で男女2人といつのはましいのではない
か、武がいつ何をしてかすか分からぬ。と

「馬鹿かお前は。大丈夫だ。お前みたいなブスを襲うぐらになら、
まだバッタと結婚したほうがました。」

「――。」

怒りが頂点に達しがみがみと怒りをぶちまける灯であつた。ちなみ
に灯はどうやらかといつと美人の部類に入るほつである。

「やういえば武さんつて、なんの仕事をしているんですか?・まさか

ジエネシス狩りで金がもじれるとほ思えませんし・・・

「ジエネシス狩りとか変なこと言つなよ。おれの仕事は泥棒だ。」

「本当ですか！通報しなくちゃー。」

そうこうと灯は携帯を取り出す。

「嘘だ。」

「もう、なんですかー。嘘ばっかりつこトーー。」

「うむ。俺の仕事はコツクだ。」

「またまた～嘘は2度も通じませさせよ～。」

「いや、本当だつて。」

「じゃあ証拠を見せてくださいー。」

「いいだらう。」

武はそつと一階のキッチンへと向かっていった。

～キッチン

キッチンにはあらゆる調理に必要なものがそろっていた。包丁がずらーっと500本くらいあり、巨大な冷蔵庫もあった。巨大な水槽もあり、の中では様々な魚やエビたちが食われるとも知らずに泳ぎまわっていた。

「『せりふ』を作るか・・・」

そういうと武は料理を始めた。

30分後・・・

「できたわ。」

そういうとテーブルにパスタをもつてきた。

「くえ～すうじですねえーではいりますー。」

そういうて灯は一口食べた。すると・・・

「あ、おこしー。」

「当たり前だる。どうだこれで分かつたか？」

灯は口にパスタをほう張りながらうなずいた。

「おれは時々王族の飯を作つてやつて金をもらつてゐるんだ。だからこんな家に住んでるんだよ。」

「すういですねえー。」

灯は感心する。

「ここの家はお礼としてもうつたんだ。他にも別荘が100はあるな。」

「

「100-なんだけす」「こんですか！」

「だからこつたろ。」

そつため息をつくと、灯のパスタ一本を手で食べた。

「ふう、じゃあ行くか。」

武はそつと出かける支度をし始めた。

「え、どこに行くんですか？」

「決まってるだろ。お前の服を買いに行くんだよ。」

「えーなんでですかー!？」

灯は驚きと疑問が混ざった感情となっていた。なぜ武が私の服を買つてくれるのだろうか。

「はあ、馬鹿かお前は。そんなダサい格好で俺の助手をするつむか?」

確かに今の灯の服装は水玉のワンピースであり、それは『オシャレ』とは言えない感じのものだった。

「余計なお世話です！」

「とにかく行くぞ。それとも俺が適当な選んで買つてくれるか?」

5分後一人はショッピングモールへと向かうのであった。

～ショッピングモール

「わあ～！可愛い服がたくさんありますね！」

灯は目を輝かせてショーウィンドウにはりついていた。

すると、高校生ぐらいの男子グループが灯のところへ近寄ってきた。

「お、可愛いね～！どう？俺たちと一緒に遊んで行かない？」

「ベタだな・・・」

武と灯は思わず笑いつらじってしまった。もちろん灯は断る。

「え・・・すいません！結構です！」

灯が断ると男子グループの中の一人が中心に立ち、他の男子は離れていく。

「へえ～俺たちの誘いを断るんだ・・・じゃあいいや！」

そう言つと、男子の腹にジエネシスドライバーが装着された。

「た、武さん！」

灯が武を呼んだ瞬間、

「変身！」

男子はそう叫ぶと、テッポウウォジェネシスに変身した。

「下がつてろ。」

武は灯にそつこつビジャスティスドライバーを装着した。

「変身。」

ジャスティスドライバーからオレンジと黒の光が武に巻きついて、仮面ライダージャスティスへと変身した。

『いくぜえー殺しても俺の誘いには乗つてもひづかー。』

『馬鹿かお前は。先に俺がお前を潰してやるよ。』

ジャスティスがそう言つと、テッポウウォジェネシスは腰にセットされた魚型の銃を構えた。

『くらえ!』

テッポウウォジェネシスが叫んだ瞬間、銃から高圧水流が発射され、ジャスティスに炸裂し、ジャスティスが2階から1階へと落ちていった。

テッポウウォジェネシスが後を追つて飛び降りる。

「武さん!」

『つー痛えな。これは速攻で潰させてもらひづか。』

『やつてみやがれ!』

2発目の高圧水流が発射されるがジャステイスはそれを避けてテツポウウォジェネシスを蹴りつけた。

だが、テツポウウォジェネシスは持ちこたえて、ジャステイスの首をつかみ上げて腹に銃を突きつけた。

『終わりだぜ。』

『お前がな』

そう言つとジャステイスは素早くベルトの右のボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのタイルが仮面ライダーの右足に纏われ、固まつていき、すぐさま右のボタンを押した。

【goodby】

電子音声が流れた瞬間テツポウウォジェネシスは銃の引き金を引いたが遅かった。

『ガイアライダー・キック。』

ジャステイスはテツポウウォジェネシスの銃を持つてゐる手にガイアライダー・キックを蹴りこんだ。

テツポウウォジェネシスは横へ吹つ飛んだが、ベルトは砕けなかつた。

『あぶねえな。いつたん引き揚げるか。』

テッポウウォジェネシスはそう言つとガラスを突き破つてショッピングモールから逃げ出した。

『逃がすかよ。』

ジャステイスはそう言つたが、その場で倒れ、変身が解除された。

「武さん！大丈夫ですか！？」

「ああ、大丈夫だ。最初の高圧水流が効いたが・・・まあいい。おい、初仕事に俺を家へ連れて行け。」

「なんでこれを初仕事に数えるんですか・・・」

つっこんだ後灯は武に肩を貸し、タクシーを呼んだ。

♪とある裏通り

「はつははははーすげえぞこの力！」

先ほどの男子が大声をあげて笑っている。

「おい、ここの力で俺になんか影響はないんだよな？」

男子が問いかけた先にチョウチンアンコウの怪物がいた。

『ああ、お前には何の影響も起きない。ただ、強いて言つなら・・・』

「？なんだよ何かあるのか？」

『その力に溺れるところだ。』

その言葉は男子の心に響いた。

「じゃあ俺には関係ないな！」

と、自分を「まかすように答えた。男子はチヨウチンアンコウの怪物に疑問を思つていてことを聞いた。

「せういえば、あなたのベルトは俺のベルトとは違うな。特別製？」

『これは、ある組織が作つていてドライバーでな。このドライバーにこれをセットすることで変身することができぬ。』

そういつて金色の細長い『ある物』を男子を見せた。

「へえ～そつなんだ。なあ、あなたも人間だろ？正体見せてくれないかな？」

『いいだろ？お前と私の仲だ。といつても昨日知り合つたばかりだがな。』

そういうてチヨウチンアンコウの怪人はドライバーから『ある物』を取り出して変身を解除した。

すると、20代後半ぐらいの銀髪のオールバックの男性へと変化した。

「お、意外と若いねー。」

「まあな。話もいきませんでござりませんが。さあ、やつと破壊を創造しろー。」

「言わねなくてもやつてやるよー。」

ハーフマウンド野子は表通りへと走つ出しだのであった・・・

To be continued . . .

第3話 TEPICO（後書き）

ふう、なんとか仮面ライダー風の終わり方ができたかと思います。
『ある物』はいずれ明らかにしていきたいと思います。
ではまた！

第4話 RI・THIZOSA（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

『力を『えよつ。その力を存分に引き出し、利用しろ。』

「おれは時々王族の飯を作つてやつて金をもらつてるんだ。だからこんな家に住んでるんだよ。」

『いくぜー殺しても俺の誘いには乗つてもひづが』

『その力に溺れるところだ。』

「言わねなくてもやつてやるよ。」

第4話 RI - THOSA

ドサッ！武がソファーに倒れる。

「ハア、ハア、これはかなり効いてるな。」

「武さんは寝てパワー回復しどいてください。相手にだつてダメージがあるのは一緒なんですか？」

「ああ、そうだな。少し寝かせてもらひ。」

そう言ひと武は毛布をかぶり、数分後には寝息が聞こえてきた。

「とにかく今は武さん回復してもらひ。私は私の仕事をしないで…」

そうこうと灯は部屋へこもつていった。

／アパート

「はあ、灯はどう行っちゃったんだろう？試験会場に怪物が出てから一度も見てないなあ・・・もしかして誘拐でもされたかなあ？」

そう呟くのは水穂であった。

灯は試験会場での一件後水穂の前に姿を現していないのである。

「あ、もうこんな時間！いけないいけない夕飯買いに行かなくちゃなう。」

やつぱうと水穂は近所のスーパーへと向かつたのであった。

～武の豪邸

「できたー！」

灯はそう叫ぶと部屋から飛び出した。
当然その大声で起きない者はいない。

「うぬせーーもう少しじぐりに跳らせりよー。」

武は灯に怒鳴ったのだがすかさず言ひ返される。

「5時間も寝れば十分じゃないですかーーもう6時ですよーー。」

「ん・・・まあな・・・」

「それより具合はどうですか？」

「ああ、いい感じだ。」

灯はほつとした。まああれだけ寝て回復しなかつたら困るのだが。

武はふと疑問に思つたことがあつた。灯の手にタブレットのような
ものがあつたのだ。

「おー、灯。お前の持つているそれなんだ？」

「あ、これですか？」これは今さつき完成した、簡単にいえばジオネ
シスコ鑑です！

「ジエネシス図鑑だと？」

武はそう尋ねると灯は満面の笑みで説明し始めた。

「これにはビデオカメラが接続されていてですね、これでジエネシスを撮影・記録します。次にその情報をネットワークから集めて図鑑の完成というわけです！」

「へえ、すごいな!? よくそんなすごいの作れたな!?」

武は素直に驚いた。

「これでも東大に受かる実力はありますからね！」

いや、関係ないだろ・・・」

武が突っ込むと警報が鳴った。

「ちゅうどいいですね！」の図鑑を試してみましょうか！」

不幸を喜ぶなよ「

そういうと2人はバイクで走りだした。

～あるスーパー

ナニワノアサヒ

— — — — !

様々な悲鳴が飛び交う。そこにはいたのは水穂であった。

「ど、ど、ど、したのー？何があつたのー？」

状況の飲み込めない水穂の前に1人の男が現れた。そう、あの高校生ぐらいの男子だ。

「お、君かわいーねーどう？俺と遊びにいかね？」

「ベタだな・・・。」

水穂は灯や武と同じことを呟いた。

「結構です・・・つていうかなんでみんな逃げてるのー？」

「へへ俺の誘い断るんだ。じゃあいいや、死ね。」

「死ね！？」

水穂はわけがわからない。すると男子の腰にベルトが装着された。

「変身。」

そう言いつと男子がテッポウオジエネシスへと変身した。

「キヤー――――――！」

水穂は悲鳴を上げて失神した。

『おいおい、倒れてるよ』『・・・まあいいや！じゃあバイバー・

・・『

とどめを刺そうとした瞬間テッポウウオジョネシスはぶつ飛ばされた。

『痛つてえな！なんだよ！？』

「俺だよ。」

そこには武と灯がいた。

「み、水穂！？」

倒れている水穂を見つけた灯りは急いで駆け寄った。

「友達か？」

「は、はい。同じゼミでした。」

「そうか。じゃあそいつと一緒に下がってろ。」

武の腰にベルトが装着され、武は両手をクロスさせる。

「変身。」

オレンジと黒の光が武に巻きつき仮面ライダージャスティスに変身した。

『さつあと瀕すか。』

『ハハハハ！お前は俺に一度負けてんだぞ！？できるかよー。』

『そういつた瞬間腰の銃をとり、高圧水流を発射した。
ジャステイスはなんとかギリギリでよけた。』

『危なえな！』

『お前まだ分からねえのか！？お前俺とではリー・チが違いすぎるんだよ！』

確かにその通りである。このままではジャステイスは近づけない。

『はあ、あんまり武器は使いたくねえんだけどな。』

『なに？』

すると、ジャステイスの腕からオレンジと黒の光が剣の形をかたどり出し、実体化した。

『これが俺の武器だ。こつからが本番だぜ。』

そう言つと、高圧水流をよけながら、テッポウオジエネシスに一太刀入れた。

『 spaアアアアン！』

『痛ーくらえ！』

テッポウオジエネシスはジャステイスに高圧水流を命中させ、ジャステイスを吹つ飛ばした。

『残念だつたな。この勝負勝敗を分けたのはリーチの差だぜ。終わりだ!』

そういうて再び銃を構える。

そのときジャステイスはベルトの対応石を剣の空洞にはめ込んだ。続けてベルトの右のボタンを押す。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡ると、アスファルトが剣の刀身に固まつていき、どんどん剣が巨大化していく。

『な、なんだと!?』

『確かに前の言つとおり勝敗を分けたのはリーチの差だな。』

そういうとベルトの右のボタンをもう一度押す。

【goodby】

電子音声が響き、ジャステイスが構える。

テッポウオジエネシスが引き金を引こうとするが、一瞬ジャステイスが早かつた。

『ガイアライダースラッシュ。』

そう呟くと一気に剣を振りおろし、テッポウオジエネシスを斬り裂いた。

『グアアアアアアアアアアアア！』

ジェネシスドライバーが粉々に砕け散つた。

「やりましたね！武さん！」

『ああ、そうだな』

一件落着かと思ひきや、チヨウチンアンコウの怪物がジャステイスを突き飛ばし、ジャステイスは壁に激突した。

『なんだお前は！？』

がれきをどかしながらジャステイスは問いかけた。

『お前』ときが知る必要はない。』

そう言いながら、襲いかかってきた。

『チツ、本当に何なんだよ！？』

ジャステイスは剣を構えて、応戦した。

スペアアアアン！キイイイイイイイイ！ドガ！

すさまじい格闘戦が繰り広げられるが、先ほどの戦いで疲労しているジャステイスが少しおされぎみだつた。

ジャステイスがチョウチンアンコウの怪人の腹を蹴り飛ばして距離をとつた。その時ジャステイスはふと疑問に思つた。

『お前のベルトなんか違うな・・・?』

『ああ、特別製なんでな。』

『いや、明らかに俺や他のジエネシスとはモテルが違うぞ・・・?
お前、本当に何者だ?』

『「ひぬせむこべい。』

そう言つとチョウチンアンコウの怪人が猛スピードで灯のもとへと走つてゆく。

『なんだとー?』

『フン。』

おそらく人質に取るつもりだろう。だが

ドオオオオオオオオオオン!

ミサイルらしきものがチョウチンアンコウの怪物に直撃し、ぶつ飛ぶ。

『・・・なに?』

すぐに起き上がって誰の仕業か確かめるが、ジャステイスや灯たち以外誰もいない。

『チツ。』

チヨウチンアンコウの怪人は軽く舌打ちすると、体を超発光させその周りにいた者全員の目をくらまし、姿を消した。

『何だつたんだいったい・・・』

ジャステイスはそう言つとベルトを外した。

「大丈夫ですか武さん！」

「大丈夫だけどお前の友達は？」

「アパートがすぐ近くなので、近所の人にも送つてもうつておきました。」

「そつか・・・しかし妙だな。」

「何がですか？」

武は何かがおかしいと感じているようだ。

「あいつのベルトは俺やジエネシスのベルトとは明らかに違うんだが・・・」

「まあいいじゃないですか！相手も逃げて行つたんだし！」

「それにあの爆撃は一体・・・」

「それは確かにそうですね・・・まあ、帰りましょつか！」

「ああ、やつだな。」

そう言つと2人はバイクにまたがり武の家へと向かつていったのであつた。

「裏通り

20代後半ぐらゐの銀髪の男性は20歳くらゐの不良たちに囲まれていた。

「おい兄ちゃん金物物出せよコラアー！？」

リーダーのような男が男性を脅す。だが、

「我らには金は腐るほどあるがお前らにて渡すわけにはいかないんだな。」

「じやあ命出せよオラマー！」

怒号とともに不良たちが鉄パイプやらバットやらで襲いかかってきた。

「君らがな。」

男性はやつぱり金色の細長い『ある物』のボタンをおした。する

【フットボールフィッシュ】

電子音声が流れ男性は金色の細内外『ある物』をドライバーに挿入

した。

すると、チヨウチャンドンロウの怪物に変身し男たちを返り討りにしてた。

『これは『ガイアメモリ』といつてな、お前ら』とさきに命を取られることはまずないように作られているんだよ。』

そう言いつと最後の一人の首を折つて投げ捨て、変身を解除した。

「ハツハハハハハハハハ！」

To be continued . . .

第4話 RI - TINOSA（後書き）

完全オリジナルといった私ですが、すみません。wのガイアメモリを入れちゃいました。とっても世界観の共有ということにしておけばいいじゃないですかね？

次のあとがきからは『ディライト』のように登場人物のおしゃべりを入っていきたいと思います！
それじゃまた！

ジエネシスドライバー説明とジエネシス図鑑？（前書き）

ジエネシスドライバーの説明とジエネシスの図鑑です！

ジエネシス図鑑は4話”とに更新していくのでお楽しみください！

ジエネシスドライバー 説明とジエネシス図鑑？

・ジエネシスドライバー

ジエネシスが装着するベルト。ジャステイスドライバーと違うところはカラーリング（各ジエネシスによつて異なる。）、チェックメイトボタンの有無、適応石の代わりにジエネシスのモチーフとなる物のデータを石化した鉱物というものなど、見た目にはかなり差がある。

メイキングの超瞬間転送システムにより使用者の意思で転送、装着され、「変身」の音声コードで作動する。ベルトが碎けても使用者に影響はないが、長期の使用（5～6年）をするとベルトが碎けると使用者は爆死する。（メイキングは改良に努めており、原因は不明。）

また、使用しているうちに殺人衝動の増加や恐怖、罪を感じなくなるという副作用がある。例としてテッポウウォジエネシスに変身した男子は当初はフットボールフィッシュコードーパントにおびえていたが、使用すると、なれなれしく会話をしていた。

・ジエネシス図鑑

N O 1 バタフライジャステイス

東大の試験管の男が変身した姿で蝶の特質をもつジエネシス。使用期間は1ヶ月程度と思われ、灯を殺害しよつとした。飛行することが可能で、扇形の剣を武器とする。本編では使用しなかつたが、空中を飛行して時々扇形の剣で斬り裂きまた上空へと飛行するヒックアンドウェイ戦法が可能。

N O 2 テッポウウォジエネシス

高校生ぐらいの男子が変身した姿でテッポウウオの特質をもつジエネシス。使用期間は2日で、自分の誘いを断つた女子を殺害しようとした。（おそらく灯をナンパする前にも1・2人は殺害している様子。）武器は腰に装着されているテッポウウオ型の銃であり、高压水流を発射する。本編では語られなかつたが、高压水流を発射するには10秒のインターバルが必要。

ジノネシスズライバー説明とジノネシス図鑑？（後編）

灯 「武さん、これ見てください。よくあるあるじやなこですか！」

武 「ほつ、すいこな。」

灯 「でしょ～、もつと褒めてください。」

武 「はあ？ お前が書いたのか？ 違うな。これを書いたのはキーショットだよ。」

灯 「設定では私なんですよ！」

武 「それではみなさん次回までやめなさい。（灯を無視しながら）！」

第5話　TOOBEE（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「あ、これですか？これは今さつき完成した、簡単にいえばジエネシス図鑑です！」

「お、君かわいーねーどう？俺と遊びにいかね？」

『はあ、あんまり武器は使いたくねえんだけどな。』

『ガイアライダースラッシュゴ。』

『お前』とが知る必要はない。』

【フットボールフィッシュ】

「ハッハハハハハハハハ！」

第5話 TOWER

「とあるビル

「課長、課長!」

「ん?なんだね?」

「社長がお呼びです。」

「社長が?」

社長秘書が課長を呼びに来たのであった。しぶしぶ秘書についていき課長は社長室へと来た。

ガチャ

「お呼びでしょつか社長?」

「ああ、来たか。まあ掛けたまえ。」

「はあ、・・・」

なぜ呼ばれたのかが見当もつかない。何だかと考へていると衝撃的な言葉が出てきた。

「今日限りで君は来なくていいよ。」

「ちよ、ちよっと待つてくださいよー。どうですか?」

「まさか君、セクハラの件は私の耳に入つてないとでも思つていたのかね？」

課長はハツとした。他言無用だときつく言つておいたのにだれかが告げ口したに違ひない。茫然として荷物をまとめているときにそばを通つた女性社員が呟いた。

「お疲れ様」

課長は「ううう」とある言葉を叫んだのであつた。

「武の家

武はネットサーフィンを満喫し、灯はジエネシス図鑑をいじついた。

「ふう、そろそろ風呂こでも入ろうかな・・・

「にげ」そろそろと灯は風呂場へと歩き出した。一日の疲れを癒すにはやっぱり風呂が一番だな！ そう呟いた時、

「今日はお前働いていないだろ。」「

と、武に図星を突かれてしまつのである。

「なんで私の心が読めるんですか！」

風呂場からそりひづりと、衣服を脱いだ。

「はあ～いい湯だな～」

おっさんくさい事を言いながら灯は湯船につかっていた。すると、なんだか赤いものがお湯に溶けていた。

「なんだろ」これ・・・「

「すごいな・・・」

「は？」

声をしたほうへ振り向くと大体20歳くらいの男性が横で灯を見て
いた。
・・・鼻血をたらしながら。

「アヤナギ」

灯は悲鳴を上げた。すると、武が一目散に風呂場へ飛んできた。

一
灯、
どうした!?

「武さん！お風呂に変な人が！」

灯は半泣きになりながら武に抱きついた。

「変な人だと？」

眉を吊り上げながら灯の指さすほうへと視線を向ける。そこにはまだ男性が灯の裸をじろじろと見ていた。

「ヒヽベええええええええええ！」

武は殺氣を膨らませたかと思ひきや、素早さも手つきでシャンパーの容器を男性の顔面へと投げつけた。といふと呼ばれた男性は、よける暇もなく顔面にシャンパーの容器がクリティカルヒットした。

「痛いな武！」

顔をわすりながらヒヽベは文句を叫ぶ。

「なんでお前はいつも人の顔面に物を投げるんだよー!？」

「逆に聞くぞこの馬鹿！なんでお前はいつも帰つてくぬと俺に声をかけないんだ！？」

「なんでだろね？」

その答えにキレた武はジャスティスドライバーを装着する。

「ま、待つてください武さん…変身はだめですよー！」

「ま、そうだな…」

～武の応接室

「ここつは尾田 藤兵衛おだ とうべえだ。簡単に言つと俺の相棒だな。」

「よひしぐなー。」

鼻にティッシュを詰めて灯に挨拶する。

「おー武。いつこないい女ゲットしたんだよ?」

「どー」にいい女がいるんだ?」

その言葉に灯はイラつとしたがスルーした。

「いい女だろこれは!胸もお尻もなかな」

言い終わる前に武の裏拳が籠兵衛の顔面に炸裂した。

「で、こいつはただの女好きだ。前までは仕事で外国に行つてたけどな。」

「ふーん・・・」

灯は籠兵衛に裸を見られた事が未だに恥ずかしかった。もちろん武にも見られていたのだが。

「で、こいつが俺の助手の水面 灯だ。まだこれといった活躍がないけどな。」

「失礼な!図鑑作つたじゃないですか!」

武は無視して続けた。

「で、籠兵衛。完成したのか?」

「ああ、もちろんだ。今車庫に入れてある。」

「そりか・・・」

何の話か分からぬ灯が割つて入る。

「あの、何の話をしてるんですか?」

「俺が外国で作ったバイクだよ。」

「バイク?」

「見せてあげるから来てござらん。武も来いよー。」

武はやつとできたかといつ表情、灯はわくわくしながら地下の車庫へと向かつていった。

→武の車庫

「すごいな・・・

「すごいーー!」

武と灯りは驚いた。車庫には銀色のバイクが一台置かれていたのであつたが・・・

「だけど地味だな。」

「失礼だな!確かに見た目は地味かもしけないけど性能がすごいんだぞ!」

「どんな性能なんですか？」

「IJのバイクの性能は、絶対に壊れないことだ！」

「「マジかー?」」

一人は同時に驚いた。

「ああ。ゾウ百頭分のおもりを百回落としても、爆弾で爆発させても傷一つ付かなかつたぞ。」

「す」」

武が褒める前にその声は警報によつてかき消された。

「へえ、俺の探知警報器まだ動いてるんだ！なんか感動するな！」

「つむせこ。いくぞ灯、籠兵衛！」

そう言つと籠兵衛は自分のバイクに、武と灯は新バイクに乗つて車庫から出た。

「とあるビル

ビルのガラスはほとんど割られ、ビル内の人々はほとんど倒れていった。

「これはひどいな・・・」

武がそう言つてビルの中に入ろうとしたとき、入口から女性が飛ん

できて武とぶつかった。

「おい、大丈夫か！？」

「痛あい・・・」

飛んできた女性が腹を抑えながら氣を失つた。すると、ビルの壁を突き破つて怪人が出てきた。

『なんだ、お前らは？このビルの人間じゃないな・・・』

「灯、あいつはなんだ？」

「待つてください・・・出ました！あいつはボアジョネシスです！」

「すげえなその機械。」

籠兵衛は感心した。

「そんなこと言つてる場合かよ。灯、籠兵衛下がつてろ。」

そう言つと武にジャステイストドライバーが装着され、手をクロスさせた。

「変身。」

武がそう言つとオレンジと黒の光が武に巻きつき仮面ライダージャステイスに変身した。

『お前もジョネシスか・・・』

『いや、俺は仮面ライダーだ。』

そう言つとジャステイスはジャステイスブレードを出現させてボアジエニスに斬りかかつた。

スパアアアアン！スパアアアアアン！

ジャステイスは斬りつけた後、腹を蹴り飛ばし、ボアジエニスは壁に激突した。

『痛いな。今度はこっちの番だ。』

そう言つと、ボアジエニスはイノシシの頭を模した拳を構えた。

シユツシユツドガツ！

ボアジエニスは連続パンチでジエニスを攻め立てる。

『チツめんどくせえな・・・』

そういうてジャステイスドライバーから適応石を取り出そうとしたとき、何者かに蹴り飛ばされた。

『またお前か！』

蹴り飛ばしたものはチョウチンアンコウドーパントだった。

『こいつのセリフだ。』

そう言つとチョウチンアンコウドーパントは体を発光させながらジ

ヤステイスに蹴りを決めようとしながら後退させる。

『チャンス!』

ボアジエネシスは、チョウチンアンコウドーパントと戦っているジャステイスの背中にストレートパンチを決めてジャステイスを吹っ飛ばした。

『よつしやああー。』

『一対一はやすがにきつこな・・・』

『終わりだ、仮面ライダー。』

チョウチンアンコウドーパントは飛び蹴りを放った。

『くそ。』

「武さん!」

「武!」

誰もが終わりかと思ったが、チョウチンアンコウドーパントにミサイルが直撃し吹っ飛んだ。

『またか・・・なんだ、お前は?』

チョウチンアンコウドーパントビルの屋上を見上げた。すると、人影が飛び降りてきて着地した。どうやら人ではなくジェネシスのようだ。

『「うるさいことお前。』

そう文句を言った者は手にロケットランチャーらしき物を持っていた。

『俺たちが終わらせる派なんだね。』

『何だと？』

謎のジエネシスはベルトのチョックメイトボタンを押した。

【HEDC&HARD】

電子音声が響き渡ると、空中にロケットランチャーらしきものが無数に出現し、チョウチンアンコウドーパントを取り囲んだ。

『なんだ、これは…？』

『知る必要はない。』

やつこいつと、もう一度チョックメイトボタンを押した。

【good】

『ウエポンズバーストゾーン。』

やつはくと、ロケットランチャーらしきものが一斉に発射され、大爆発した。

『ぐああああああああー。』

チョウチンアンゴウドーパントはそこから消えていた。

『チクショー何なんだよ！？』

ボアジエネシスは逃げて行つた。謎のジエネシスは追う様子はなかつた。

『お前は何者だ？』

ジャステイスはベルトをはずしながら問い合わせた。

『俺の名はウエポン。そうだな、お前がさつき言つてたつけ。俺は仮面ライダーウェポンだ。』

— — —

武、灯、籠兵衛は声も出なかつた。

To be continued . . .

第5話　TOUBEÉE（後書き）

武 「おいおい、今回登場人物多すぎだろ・・・」

灯 「いいじゃないですか、にぎやかで！」

籠兵衛 「ああ、灯ちゃんの裸も見れたしね」

ドガツバキッ（灯が籠兵衛を殴る音）

籠兵衛 「すいませんでした・・・。」

武 「といふか俺以外にもライダーがいたとはな・・・驚いたよ。」

灯 「あのライダーの詳細は次回で!..」

3人 「また次回をお楽しみにーー!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0306y/>

仮面ライダージャスティス

2011年11月21日11時38分発行